



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パトロクロスの葬礼競技と『アイティオピス』 (2)
Author(s)	川崎, 義和
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 73, 1-27
Issue Date	2020-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78110
Type	departmental bulletin paper
File Information	1.pdf



【論文】

パトロクロスの葬礼競技と『アイティオピス』(2)

川 崎 義 和

10年にわたるトロイア戦争の終わりに近い時期を題材とする散逸した英雄叙事詩『アイティオピス』⁽¹⁾には、アイティオピアの王メムノーンに関する物語とその後日談が語られていたことが後5世紀の新プラトン学派の哲学者プロクロス⁽²⁾による梗概から知られている。即ち、アキレウスがトロイアへ軍を率いて来援したメムノーンを倒した後パリスとアポローン神によって殺され、その死骸をめぐる激しい闘いの後アキレウスの葬儀と競技会が催されるという内容だが、この物語はホメロスの長編英雄叙事詩『イーリアス』に見られるアキレウスの親友パトロクロスの出陣、戦死からパトロクロスの葬礼競技に至るまでの一連のストーリーと平行関係にあり細部にわたって類似点が多い。主にこのことから『イーリアス』がこの『アイティオピス』、或いはこれら両詩よりも古いメムノーンの物語⁽³⁾から影響を受けたという見方が特に20世紀半ば頃からしばしば論じられて来たことは前編の論考の冒頭で触れた通りであり、今日一般に「新分析論」(neanalysis)と呼ばれるこの学説は、当初厳しい批判を受けたものの、近年広く支持される傾向にある⁽⁴⁾。

『アイティオピス』の作者アルクティーノスは古代の年代考証によれば前8世紀の詩人とされる⁽⁵⁾が、現代では幾つかの理由⁽⁶⁾からむしろ後代、恐らく前6世紀の詩人と見做す論者が多く、時にこの詩は文字で作詩された作品であるという見解⁽⁷⁾もある。また、今日の指導的新分析論者たちはトロイア戦争に関するギリシア初期の叙事詩圏(Epic Cycle)に属する諸詩(『アイティオピス』を含む)がホメロス詩に先行するとは論じていない⁽⁸⁾。しかし、最近でもこれに対して『イーリアス』が『アイティオピス』の影響下にあった可能性を示唆する見方⁽⁹⁾もあり、意見が錯綜している。こうした中で前編の論文では、一般説に従えば前8世紀後半頃に成立したとされるホメロス詩『イーリアス』が『アイティオピス』から影響を受けた可能性が結論として示された。本稿ではこの立論を補強するために更にこの両叙事詩の関係について前編で扱われなかった他の幾つかの問題点に関して再検討を試みることを目的とする。

具体的には、第一章においてホメロスのもう一つの英雄叙事詩『オデュッセイア』(24.36-92)と『アイティオピス』に言及されているアキレウスの葬儀を中心に比較検討を試み、その他アキレウスが死後生を送ったとされるレウケー島とミレートス(『アイティオピス』の作者アルクティーノスの出身地)市民の黒海への植民活動(前7-6世紀)の関係について、またアキレウ

スの英雄崇拜等について考察検討する。第二章では、アキレウスの友人であるアンティロコスがメムノーンの攻撃から父を救出するために戦死したエピソードが『アイティオピス』に由来するか否かを主な検討の対象とする。第三章では、『イーリアス』の最終行(24.804)に付された異読が『アイティオピス』の真正な断片と見る説について再考し、更にギリシア初期叙事詩に付随し、『アイティオピス』にも関わるテキストの固定化に関する問題について若干考察を試みる。

I

上述のように、『アイティオピス』と『イーリアス』のストーリーには細部に亘って類似点が少なくないが、『オデュッセイア』にも『アイティオピス』のエピソードに触れている印象を与える箇所が所々見られる。例えば、メムノーンによるアンティロコスの殺害⁽¹⁰⁾、戦死したアキレウスの武具をめぐるアイアースとオデュッセウスの争い⁽¹¹⁾であるが、特にアキレウスの死後のストーリー⁽¹²⁾には、一部意図的とも見られる類似点や異同が少なくない。プロクロスの梗概によれば、『アイティオピス』ではアキレウスの死後その母である女神テティスとその姉妹たち(ネーレーイスたち)、更にムーサたちがやって来て彼の死を嘆き、女神は火葬の薪の山からアキレウスをさらってレウケー島(「白い島」)へ運び、その後ギリシア軍が墳墓を築いて競技会を催した。以下、冥界において亡霊のギリシア軍の総帥アガメムノーンがアキレウスの霊に語る『オデュッセイア』24巻⁽¹³⁾のいわゆる第二ネキュイア(νέκυια「冥府降り」)の葬儀の模様を中心に『アイティオピス』との違い等を時間を追って比較対比し、その右にその各々に対応する『イーリアス』のパトロクロスの死から葬礼競技までの箇所を比較のため付け加えた⁽¹⁴⁾。

	アキレウスの戦死から競技会まで (<i>Aeth. arg.</i> 21–3 Bernabé)	アキレウスの死から競技会まで (<i>Od.</i> 24.36–92)	パトロクロスの死後競技会まで (<i>Il.</i> 17–23)
1	アキレウスの遺体をめぐって両軍が激しく戦い、アイアースは遺体を抱き上げて船陣へと運び、オデュッセウスはトロイア勢を撃退した ⁽¹⁵⁾ 。	トロイア方とアカイア勢(ギリシア軍のこと)がアキレウスの遺体をめぐって戦って死んだ。そして、遺骸は戦場から船陣へと運ばれた。	パトロクロスの遺骸をめぐって両軍が激しく争う中、メネラーオスが勇戦してメーリオネースと共に遺体を船のところへ運び、2人のアイアースが追撃する敵を退けた。(<i>Il.</i> 17)
2	ギリシア軍がアキレウスの遺体を納棺のために整える(<i>protíθενται</i>)。	ギリシア軍がアキレウスの遺体を臥床に(<i>ἐν λεχέεσσι</i>)置き、清めてから涙を流し髪の毛を切って捧げた。	アキレウスの部下たちがパトロクロスの遺体を清め臥床に(<i>ἐν λεχέεσσι</i>)横たえてから、ミュルミドーンたちはアキレウスを取り巻いて悼み続けた。(<i>Il.</i> 18.343–55)
3	アキレウスの死後テティスはムーサたちと姉妹たちと共にやって来て彼の死を嘆き悲しんだ。	テティスは報せを聞いて姉妹たちを従えて海から現れ、アキレウスの死を嘆き、9人のムーサたちが哀悼の歌をうたった。	テティスはパトロクロスの死を嘆くアキレウスの叫び声を聞くや、姉妹のネーレーイスたちとともに落涙しながらやって来て、悲嘆の理由を問う。(<i>Il.</i> 18.35–77)

4	その後テティスは火葬の薪の山からアキレウスをさらってレウケー島へ運ぶ。	テティスから与えられたヘーパイストス作の黄金の両耳壺(ἀμφιφορεύς)にアキレウスとパトロクロスの骨が一緒に入れられた。右のパトロクロスの願いが成就される。	パトロクロスはアキレウスにテティスから与えられた黄金の壺(ἀμφιφορεύς)に自分の骨をアキレウスの骨と一緒に置くよう願う。(Il. 23.82-92)
5	(上記2のアキレウスの納棺の準備の前に、アンティロコスの遺骸が埋葬された。)	アンティロコスの骨はアキレウスとパトロクロスの二人の骨を納めた壺とは離れて置かれた。	パトロクロスの遺骸が焼かれた後、黄金の器(φιάλη)に入れられ、陣屋の中に(ἐν κλισίῃσι)置かれた。(Il. 23. 243-4, 253-4)
6	アカイア勢は墳墓を築き、	アカイア軍はそれらの遺骨の上に大きく立派な墳墓を、ヘレスポントスの岬に築いた。	アキレウスはアカイア軍に墳墓を築くよう願う。(Il. 23.245-8)
7	(アカイア勢は)アキレウスのために競技を催す。	女神テティスは神々に願い、立派な賞品を競技の場に差し出した。	アキレウスは帰ろうとした軍勢を引き留め、船陣から賞品となる鼎、馬、牛等を運ばせ、競技会を催す。(Il. 23.257-61)
8	死後アキレウスは(至福の島)レウケー島に住まう。	陰鬱な冥界に置かれているアキレウスは不満を述べる。(Od. 11. 488-91)	アキレウスの死の定めが繰り返し予示される。(E.g. Il. 18.95-6, 19.408-17, 21.110-3)
9	アンティロコスはアキレウスの友。	アンティロコスは、戦友の中でもパトロクロスに次いでアキレウスが特に重んじた友。	『イーリアス』ではパトロクロスは特にアキレウスの無二の親友とされ、その友情が強調される。

この表の5、7、9を除く1～8から『オデュッセイア』と『イーリアス』のストーリーに或る程度の対応関係が窺われるが、『アイティオピス』と『オデュッセイア』のアキレウスの死後(1～3を除く)については、細部で異同が多い。しかし、遺体の取戻し、葬儀、埋葬、その後の競技会という一連の大きな枠組みにおいては対応が見られ、特にムーサたちがテティスとその姉妹たちの嘆きに加わるという3が一致することから、この対応関係を単なる偶然の一致に帰することは考え難く、両詩が共通の伝承に依拠しているか、或いは『オデュッセイア』の詩人が『アイティオピス』を知っていたと推定される⁽¹⁶⁾。因みに、上の表のホメーロス詩の諸巻に関する最近の注解者たち⁽¹⁷⁾は、新分析論を支持する傾向がある。

しかしながら、この学説に対する反論として、別な見解が提案されている。つまり、『イーリアス』の詩人ホメーロス自身が別な機会にアキレウスの死を語ったとし、『イーリアス』のモデルとして『アイティオピス』、或いはメムノーンに関する想定上の古い歌(**Memnonis*)といった外部の source を仮定する必要はないという主張である⁽¹⁸⁾。その提案者の一人である Willcock⁽¹⁹⁾によれば、ホメーロスはかつてアキレウスがトロイアのスカイア門で戦死し、遺骸が取り戻された後、テティスやネーレーイスたちが彼の死を嘆いた模様を語ったが、パトロクロスの物語の形成にはこうした背景があった、またアキレウスの葬儀と競技会は『オデュッセイア』24巻に言及されているように盛大に催され、『イーリアス』23巻がその余韻(resonance)を伝えるという。とはいえ、この説では次に述べるアンティロコスとアキレウスの友人関係、また

何故パトロクロスの死後アンティロコスの役割が目立ち始めるのか、更に表の5にあるように何故3人の骨が同じ塚に埋葬されるのか、何故『イーリアス』23巻の葬礼競技会に木馬の物語を示唆する人物が集中的に出場しているのか等を十分に説明することは難しいと言わなければならない。

そこで、まずアンティロコスとアキレウスの友人関係の手掛かりとなる以下の箇所（表の4-6）を検討することにした。

Od. 24.76-9 ἐν τῷ (sc. ἀμφιφορῇ) τοι κείται λεύκ' ὅστέα, φαίδιμ' Ἀχιλλεῦ,
 μίγδα δὲ Πατρόκλοιο Μενoitιάδαο θανόντος,
 χωρὶς δ' Ἀντιλόχοιο, τὸν ἔзоχα τίς ἀπάντων
 τῶν ἄλλων ἑτάρων μετὰ Πάτροκλόν γε θανόντα.

「その器⁽²⁰⁾にこそ、あなたのお骨は納まってるのだ、誉れあるアキレウスよ、
 先立たれたメノイティオスの子、パトロクロスのと一緒に交ざって。
 アンティロコスのとは別にして、あなたが他のすべての同僚、その誰よりも、
 先立たれたパトロクロスの、次にとりわけ推重されていたものだが。」

この個所では3人の骨が同じ墳墓内に埋葬されたが、アンティロコスの骨はアキレウスとパトロクロスの骨を納めた壺から離れて置かれている。一見不調和なこの骨の埋葬について Kullmann⁽²¹⁾によれば、この3人の遺骨を同じ丘墓に納めたことが『オデュッセイア』の新たに加えた点であり、パトロクロスが自分の骨をアキレウスの骨と同じ壺に納めるようにと願う件（上の表4の *Il.* 23.91-2）のみならず、パトロクロスとアキレウスの親友関係（『イーリアス』）とアンティロコスとアキレウスの親友関係（『アイティオピス』）の両方のバランスにも配慮した、つまり3人の骨を共通の墳墓に入れることで、アンティロコスが冷遇（軽視）されていると見られないよう調整を図ったという。アンティロコスは『アイティオピス』においてアキレウスの親友として重要な役割を果たしたと推定されており、詩人は恐らくこのことを無視できなかったと考えられる。実際、英雄の第一の親友（‘best’ friend）は一般に一人とされ⁽²²⁾、この説に従えば『アイティオピス』（或いは **Memnonis*）のアンティロコスの方がアキレウスの元来の traditional な親友であって、よく言われているように⁽²³⁾『イーリアス』に見られるパトロクロスとアキレウスの友人関係はそこから移された⁽²⁴⁾と説明できる。

しかし、詩人は以前の伝承よりもパトロクロスに遥かに大きな役割を与えた⁽²⁵⁾ためにアンティロコスの方は影が薄くなったが、一方でパトロクロスの死後アキレウスとアンティロコスの友人関係が既知であるような印象を与えるのはそうした理由によると考えるべきであろうか⁽²⁶⁾。Heubeck⁽²⁷⁾が述べるように、『イーリアス』ではアンティロコスの主な役割はパトロクロスの戦死の報せをアキレウスに伝えるだけで補助的に過ぎなかったというわけではなく、明らかにアキレウスの親友としてパトロクロスに取って代わり始める⁽²⁸⁾。『オデュッセイア』⁽²⁹⁾では、実

際にアキレウス、パトロクロス、アンティロコス、大アイアースの名がこの順序で述べられており、アンティロコスを軽んじたことは原文からは窺えない。

とはいえ、プロクロスの『アイティオピス』の梗概は詳細には触れず、アンティロコスがメムノーンによって殺害され、アキレウスがメムノーンを討ち取ったと述べているに過ぎないことは事実であり⁽³⁰⁾、このことからアキレウスとアンティロコスの友情はアキレウスとパトロクロスの友情程強くはない⁽³¹⁾という意見もある。これについては、後述のネストールの救出話に関する考察のところで触れたい。

ところで、上の表で特に目立つ相違点は、表の4と8に見られるようにアキレウスがテティスによってレウケー島へ運ばれ⁽³²⁾、死後ここで生を送った⁽³³⁾ことである。レウケー島はドナウ川河口約50 km 沖に浮かぶ島⁽³⁴⁾と伝えられ、またアキレウスは歴史時代には黒海北部で崇拝され、レウケー島はその中心地であった⁽³⁵⁾。ミレートス人による黒海沿岸への植民活動はしばしば前7-6世紀に置かれることから、ミレートス出身のアルクティーノスの詩『アイティオピス』はその植民活動を反映していると推測され、従って『イーリアス』よりも後代の作品であるとする見解も見られた⁽³⁶⁾が、必ずしも島の場所が初めから特定されていたと考える必要はなく、多くの研究者たちは古くは神話上の島と信じられていたと推定しており⁽³⁷⁾、『アイティオピス』を後代の作品と判断する確かな根拠とは言い難い。

このことに関連して、『アイティオピス』の表の4と6に見られる奇妙な食い違いについて述べておきたい。この梗概の記述⁽³⁸⁾によれば、火葬の積み薪からアキレウスは母テティスによってレウケー島へ運ばれたが、ギリシア軍は墳墓を築いたという。単純に考えれば、運び去られたアキレウスの遺骨は存在しないはずであり、実際墳墓は cenotaph⁽³⁹⁾であったという見解⁽⁴⁰⁾も見られる。そうした例は人身御供となったイーピゲネイアの伝説にも見られる。『キュプリア』の梗概⁽⁴¹⁾によれば、トロイア遠征軍が2度目にアウリスに集結した際に暴風雨により出帆できないため、総帥アガメムノーンの娘イーピゲネイアを生贄として捧げようとしたが、女神アルテミスが彼女をタウロイ人のもと（クリミア半島南西部）へ運んで不死の身とし、祭壇の傍に彼女の代わりに鹿を置いたという。しかしながら、Kullmann⁽⁴²⁾が指摘するように、アキレウスが運び去られたにもかかわらず、アカイア軍が彼の骨のために墳墓を築いたというのは不可解と言わざるを得ない。これについては、二通りの解釈が出されており、一つは遺体が運ばれるというモチーフと、遺体が焼かれ骨が集められて墳墓がその上に築かれるという二つの両立しないモチーフが結合された結果という見方⁽⁴³⁾である。

第二の見方は、アキレウスの死すべき部分が火葬用の積み薪の上で焼かれ⁽⁴⁴⁾埋葬された時に、不死の部分が至福の島へ赴いたという古代の伝承⁽⁴⁵⁾である。どちらが真に近いかは判断が困難であろうが、アキレウスの来世について次に述べる『オデュッセイア』の version とは異なるとはいえず、恐らく彼の骨がトロイアの地に埋葬された点で両詩は一致している。因みに、アキレウスの墓の上やその近くにしばしば彼の亡霊が出現すると伝えられている⁽⁴⁶⁾。特に、アキレウ

スの墓でその霊を宥めるために殺害されたトロイア王女ポリュクセネーの伝説⁽⁴⁷⁾がよく知られ、Monro⁽⁴⁸⁾によればその生贄は英雄崇拜の一端を示すという。真偽の程はともかく、『アイティオピス』の中で触れられている墳墓にはこうしたアキレウスの墓にまつわる民間信仰 (tomb cult) が背後に存在したかも知れない。

これに対して『オデュッセイア』では、アキレウスは死後冥王の館に置かれている。『アイティオピス』と著しく異なるのがこの点であるが、これについて死後の世界観、来世観 (eschatology) に着目した Edwards⁽⁴⁹⁾ は、二通りの説明を試みている。即ち、『イーリアス』にも知られたアキレウスの死に関する伝承を『オデュッセイア』の詩人は11巻の第一ネキュイア(「冥府降り」)と24巻の第二ネキュイアに残し、後代の革新的作品『アイティオピス』のレウケー島については知らなかった、他方第二の説明として『オデュッセイア』の詩人は『アイティオピス』の version を熟知していたがこれを受け入れず、意識的に『イーリアス』の権威に従ったとし、後者の仮説がより可能性が大きいと述べている。その主な理由として、『アイティオピス』に語られている至福の来世観がミーノーア時代、ミュケーナイ時代に遡り、また上の表に見られるように『オデュッセイア』の詩人がアキレウスの戦死から競技まで詳しく語っていることから判断してこの詩人が『アイティオピス』を熟知していたことは疑いないという点を挙げている。

確かに上の表8に見られるように、『オデュッセイア』の第一ネキュイアにおいてアキレウスの霊が冥界での陰鬱な生の不満をオデュッセウスに漏らしており、『イーリアス』においても同じく表8に見られるようにアキレウスの暗い無情の死の運命が繰り返し予告されている。実は研究者の間では、こうした背景には詩人の宗教的な或る詩的意図が含まれているという見方がある。つまり、パトロクロスが冥界の川を渡って亡者の霊の仲間に入れるよう茶匙に付することをアキレウスに願う『イーリアス』23巻の葬儀の場面に特に強く表れており⁽⁵⁰⁾、死或いは火葬は生者の世界への亡者の関わりを完全に断つことを意味する⁽⁵¹⁾。こうした死生観は英雄崇拜とは相容れない詩人自身の特有な宗教的信念から来るものであって、『オデュッセイア』にも多少見られるが特に『イーリアス』においては、崇高で悲劇的效果、悲壮感をもたらすという叙事詩人の詩的意図を持つと解する見解⁽⁵²⁾である。いずれにしても、『アイティオピス』の version が後代の特徴を示すとは言い難い。

ところで、叙事詩圏詩ではしばしば英雄に不死が与えられる。例えば、『アイティオピス』では曙の女神エーオースがゼウスに願って子のメモノーンに不死を与え⁽⁵³⁾、前述のようにテティスはアキレウスをレウケー島に住まわせた。また、『テーレゴニアー』の梗概⁽⁵⁴⁾では、キルケーがテーレゴノス、テーレマコス、パーネロペーを不死にしている。Burgess⁽⁵⁵⁾によれば、死者が来世に至福の地を得るというモチーフは地中海文化においては少なくとも前二千年紀に遡り、ホメロス詩にもそうした英雄崇拜 (tomb cult を含む)⁽⁵⁶⁾を示唆している例⁽⁵⁷⁾がないわけではないという。いずれにしても、英雄の不死化を含むことを理由に叙事詩圏詩をホメロス以降、後代の作品であると断定⁽⁵⁸⁾すべきではないかも知れない。

II

前述したように、何故アンティロコスがパトロクロスの死後目立ち始め、葬礼競技に2回出場しているのか、等については以下の箇所が手掛かりになるかも知れない。

Pind. *Pyth.* 6.28–42

- ἔγεντο καὶ πρότερον Ἀντίλοχος βιατὰς
νόημα τοῦτο φέρων,
30 ὃς ὑπερέφθιτο πατρός, ἐναρίμβροτον
ἀναμείναις στράταρχον Αἰθιόπων
Μέμνονα. Νεστόρειον γὰρ ἵππος ἄρμ' ἐπέδα
Πάριος ἐκ βελέων δαΐχθεις· ὁ δ' ἔφεπεν
34/35 κραταιὸν ἔγχος· Μεσσανίου δὲ γέροντος
δονηθεῖσα φρὴν βόασε παῖδα ὄν,
χαιμαίπετρες δ' ἄρ' ἔπος οὐκ ἀπέριψεν· αὐτοῦ
μένων δ' ὁ θεῖος ἀνὴρ
πρίατο μὲν θανάτοιο κομιδὰν πατρός,
40 ἐδόκησέν τε τῶν πάλαι γενεᾷ
ὀπλοτέροισιν ἔργον πελώριον τελέσαις
ὑπατος ἀμφὶ τοκεῦσιν ἔμμεν πρὸς ἀρετάν.

「昔も屈強なアンティロコスが

そのような心の持ち主であった。

- 30 彼は父のために命を落とした、アイティオプス人の
人殺しの将メムノーンを
待ち受けて。というのも、ネストールの戦車（の進み）を馬が
パリスの矢に射られて阻んだからだ。メムノーンの方は頑丈な
34/35 槍を振り回していた。メッセーネーの老人の
心は慌て乱れ、大声をあげて自分の子を呼んだ。
放った叫びは（無駄に）地面に落ちず、ちょうどその場に
神々しい武者は踏み止まり
命をかけて父を救い、その生命を贖った。
40 古い時代の若者たちの間で、実に立派な
行為を行った彼は、親たちへの孝心において
最も尊いという評判を得た。」

父を救うためにアンティロコスが犠牲となったというこのネストールの救出話（いわゆる *Nestors Rettung*）は、古代においては有名な逸話であって⁽⁵⁹⁾、上記のピンダロス『ピューティア競技祝勝歌』（前 490 年にシチリア島のクセノクラテースが戦車競走で優勝した功績を称える歌）がこれを伝える現存最古の作品とされる。一般に『アイティオピス』の中で歌われていたと推定され、Welcker⁽⁶⁰⁾によれば、アンティロコスの殺害に逆上（„Hingerissenheit“）したアキレウスの思いを聴衆も共感できるように新しいモチーフを付け加えた『アイティオピス』の作者アルクティーノスの創意に由来するという。もちろん Welcker は『イーリアス』8.80-117に見られるネストール救出話の方が古いと見做している。また、Erbse⁽⁶¹⁾が述べるようにこのネストールの危機の場面を変形することによって英雄メムノーンの劇的な破滅をもたらすのみならず、同時にアンティロコスの英雄としての生命を犠牲的死によって終わらせ、更にアキレウスに母テティスのメムノーンに関する警告を無視して出陣しメムノーンに攻撃を開始する動機を与えたアルクティーノスの着想は鮮やかとも言えるかも知れない。Erbse⁽⁶²⁾はより優れた動機付けはより古いとは限らないと評している。しかしながら、逆に『アイティオピス』の方が『イーリアス』よりも古いネストール救出の話形を留めていると見る研究者は今日でも多い⁽⁶³⁾。

その理由の一つに、Kullmann⁽⁶⁴⁾が述べるように、『イーリアス』8巻のネストールの危機の場面で添え馬のモチーフが不適切に使用されている点が挙げられる。即ち、添え馬がパリスの矢に射られ他の2頭の馬が混乱状態に陥ったため身動きができず戦場に取り残されたネストールは、添え馬をつなぐ曳き綱を断ち切ろうとするがうまくゆかず、その間にヘクトールの戦車が接近する。これを目敏く見抜いたディオメデースが自分の戦車にネストールを乗せて救出した。この場合、ディオメデースがヘクトールの接近を食い止めたならば、ネストールはその間に綱を断って添え馬を切り離し、自分の戦車で脱出できたはずである。実際、ディオメデースは共にヘクトールを追ひ払うよう、オデュッセウスに呼びかけている。しかし、オデュッセウスは（奇妙にも）傍らを走り抜けていった⁽⁶⁵⁾ためディオメデースは独りでネストールの救出に向かうことになった⁽⁶⁶⁾。

これに対して、上のピンダロスの version は添え馬には触れていないが、その話形に適している。近くにアンティロコス以外に救助者はいず、戦車を乗り換えたという形跡もないことから、ネストールはアンティロコスがメムノーンと戦っている間に添え馬を切り離し自分の戦車に乗って逃れたと解釈できる⁽⁶⁷⁾。しかし『イーリアス』8巻の場合、ネストールはディオメデースの戦車に乗り換えたが、添え馬のモチーフは必要ではなく、例えば他の2頭の馬の一方が射られたとすれば十分であって、このモチーフを用いることで筋の展開に不自然な印象を与える結果となったと言わざるを得ない。以上が、ピンダロスの方が本来の（恐らく、『アイティオピス』の）話形⁽⁶⁸⁾を伝えていたと推定されている主な理由である。

このことが真であれば、前編の論文の初めに触れた『アイティオピス』と『イーリアス』の

間の対応・類似関係⁽⁶⁹⁾に新たに幾つかの例が加わることになる。つまり、敵のリーダーによる親友の殺害とその復讐という点であり、具体的には、『アイティオピス』⁽⁷⁰⁾ではアキレウスがアンティロコスを殺害したメムノーンを討ち取り、『イーリアス』⁽⁷¹⁾ではアキレウスが親友パトロクロスを殺害したヘクトールを倒し復讐した。実は、この両詩の対応関係（即ち、アキレウスとパトロクロスの友情～アキレウスとアンティロコスの友情、ヘクトールに対するアキレウスの復讐～メムノーンに対するアキレウスの復讐）が強いという解釈が新分析論の主要部分（つまり、『アイティオピス』（或いは **Memnonis*）に見られるこのストーリーが『イーリアス』のモデルになったとする説）の基盤となっている⁽⁷²⁾。

これに対して Burgess⁽⁷³⁾ は、アンティロコスの殺害を伝える『アイティオピス』の梗概等⁽⁷⁴⁾ではアンティロコスがメムノーンによって討たれたとされるが、そうしたアキレウスの復讐心やアンティロコスへの強い友情は窺えず、アキレウスによるメムノーンの殺害は戦友の殺害に対する復讐という typical なモチーフの一つに属すると解し、Allan⁽⁷⁵⁾ もこの ‘vengeance theory’ を疑問視する Burgess を支持している。確かにメムノーンによるアンティロコスの戦死の詳細を直接伝える古い文献は知られていない⁽⁷⁶⁾ことは事実であり、言うまでもなくこの復讐説はアンティロコスとアキレウスの友情が強いかな否かに関わってくる。

とはいえ以下の点から、この親友関係は『イーリアス』の 17 巻から表面に現れ始め、恐らく古い伝承を反映すると考える理由が十分あると思われる。詩人はパトロクロスの戦死後若いアンティロコスにこの報せをアキレウスに伝える役目を託している⁽⁷⁷⁾。アンティロコスはその時点までに『イーリアス』4.457 以降 8 回登場するが、通例の戦闘場面に現れるに過ぎない。しかし、その後アンティロコスの役割は目立って増加し始め、Currie⁽⁷⁸⁾ が指摘するように 17.695-6 ではメネラーオスからパトロクロスの戦死をアキレウスに報せるよう指示されたアンティロコスは動揺して涙を流し、18.16-7 では熱い涙を流しながら (δάκρυα θερμὰ χέων) アキレウスに近づきパトロクロスの死の報せを報告する。パトロクロスも同様に 16.2-3 では熱い涙を流しながら (δάκρυα θερμὰ χέων) アキレウスの傍に立つ場面があり、詩人はパラレルなシーンに明らかに関心を抱いていたと考えられる。

特にパトロクロスの葬礼競技においては、アキレウスとの密接な関係が強く現れている。戦車競技中事故によって最下位となったエウメーロスにアキレウスは二位の賞品を与えようとするが、その時二着となった若いアンティロコスが抗議する場面で、アキレウスは怒ることなく微笑みを浮かべた⁽⁷⁹⁾。この笑みは『イーリアス』で初めて、しかも全作品を通して唯一この箇所のみであって、両者の親密さを示唆すると見られる⁽⁸⁰⁾。また『イーリアス』23.785-97 の徒競走では、最下位の 3 位となったアンティロコスは神々が年配者をひいきすると不満を述べるが、アカイア勢中アキレウスに優る走者はいないと褒めたため、この友から 3 位の賞品を 2 倍に追加された。

こうした若く未熟なアンティロコスの不平不満や抗議とアキレウスの温和な受け答えを示す

性格描写は、聴衆がアンティロコスとアキレウスの親密さ、更にアンティロコスの悲劇的最期を既に知っているとは仮定すれば、容易に理解できるかも知れない⁽⁸¹⁾。新分析論者たちがパトロクロスの葬礼競技のモデルとなったと想定するアキレウスの葬礼競技においてアンティロコスは既にメモノーンによって討たれているので、この競技には出場するはずはないが、パトロクロスの葬礼競技に出場するのみならず、2回の競技（戦車競走と徒競走）に参加し（因みに、競技参加者14人の半数近くの6人が2回以上出場している）、しかも他の『イーリアス』の中心人物に勝るとも劣らぬ活躍をしていることは一見奇異な印象を与えるが、アンティロコスの後の戦死のストーリーを知る聴衆であれば、違和感のある描写ではなかったと言えるかも知れない。

『オデュッセイア』24巻で、詩人がこの3人の親友関係を考慮しつつ3人の骨を同じ墳墓に納めたことは既に述べたが、パトロクロスの死後この競技会においても詩人はアンティロコスとアキレウスの友情に配慮し、3人の親友関係のバランスを調整しようと試みたと推測される。前述のように、英雄の第一の親友（‘best friend’）は一般に一人とされるという説が正しければ、この見方に有利かも知れない。このように見てくると、アンティロコスとアキレウスの親友関係を必ずしも否定する必要はなく、実際クイントス『ポストホメーリカ』の幾つかの箇所⁽⁸²⁾ではアンティロコスが殺害されたことに対する強い怒り或いは復讐心が現れており、アキレウスによるメモノーンの殺害を単なる敵の殺害という typical なモチーフの一つとして処理する必要もない⁽⁸³⁾と思われる。

最近 Kelly⁽⁸⁴⁾ は、ネストールの救出場面の詳細な言語、文体、話形の分析・考察を通して、『イーリアス』の詩人がこのシーンを描写する際に traditional なモチーフ以外には何も利用せず、ピンダロス『ピューティア競技祝勝歌』6の描写が『アイティオピス』のエピソードに由来するという見方は非常に疑わしい、またピンダロスが『イーリアス』8巻、23巻を基にこのエピソードを作り上げたと論じている⁽⁸⁵⁾。以下の表は、Kelly⁽⁸⁶⁾ がその論拠として挙げる主な措辞の類似例を示す。

Pind. <i>Pyth.</i> 6.28–42	<i>Il.</i> 8.80–117（ネストールの危機）	<i>Il.</i> 23.257–897（パトロクロスの葬礼競技）
28 βιατάς	103 βιῇ λέλυται	576 βιησάμενος, 578 βίῃ
29 νόημα	91 νόησε	
31 ἀναμείναις, 38 μένων	78 μίμνειν, 79 μενέτην, 80 ἔμιμνε, 96 μέν'	
32 Νεστόρειον ... ἵππος	113 Νεστορέας ... ἵππους (192 Νεστορέην)	
32 ἄρμ' ἐπέδα		585 ἄρμα πεδήσαι
36 βόασε	92 ἐβόησεν	
39 κομιδὰν πατρός	(186 κομιδήν)	411 κομιδὴ παρὰ Νέστορι
40–1 γενεᾷ ὀπλοτέροισιν	(9.58 ὀπλότατος γενηήφιν)	

確かに、ピンダロスと『イーリアス』8巻には類似する語や措辞が少なくないが、23巻の例は4例のみであり、『イーリアス』8巻、23巻からこのエピソードを創作したという根拠としては不十分と思われる。これについて Currie⁽⁸⁷⁾ は精密な検討・考察によって反論を試み、『イーリアス』の散らばった箇所からストーリーを作り出すという Kelly の結論に対しては説得力に欠けると批判しており、ピンダロスが後に Cycle (叙事詩圏詩) にまとめられたアルカイック期の叙事詩群(『アイティオピス』を含む)を頻繁に利用したことは一般に疑いないとされている⁽⁸⁸⁾ 点もこの反論に有利な点の一つと言える。

このように、アキレウスとアンティロコスの友情は強く、恐らくはアンティロコスの殺害者メムノーンに対する強い復讐の念は否定できないと考えるべきであろう。Currie は『イーリアス』の複数の箇所からストーリーを作り出したという Kelly の見解には批判的であるが、逆に見れば、『アイティオピス』の方が古く、『イーリアス』8巻、23巻やピンダロスに影響を与えたとも推定される。いずれにしても、特にパトロクロスの葬礼競技においてアンティロコスの存在が目立つのは以上のような背景があったからかも知れない。既に述べたようにアンティロコスの方がアキレウスの traditional な親友であった可能性を思い起こせば、理由のないことではないと考えられる。23巻においてネストールがアンティロコスに語る戦車競技に関する助言⁽⁸⁹⁾ は古いモデル(『アイティオピス』)の中の親子関係の絆(忠孝)の反映と見るべきであろうか。

III

ところで、プロクロスの梗概によれば、『アイティオピス』の前半部分ではアマゾーンのペンテシレイアが援軍としてトロイアへ来援しアキレウスに討たれたと語られていた⁽⁹⁰⁾。他方、『イーリアス』24巻の最終行(ὥς οἱ γ' ἀμφίεπον τάφον Ἕκτορος ἵπποδάμοιο 「かようにして、馬を馴らすヘクトールの葬いを営んだもの。」)に付された古注(Σ T II. 24.804)には異読として以下の2行が伝えられている。

Aeth. fr. 1.1–2a Bernabé

ὥς οἱ γ' ἀμφίεπον τάφον Ἕκτορος· ἦλθε δ' Ἀμαζών,

ἄρῃς θυγάτηρ μεγάλῃτορος ἀνδροφόνοιο.

「このようにヘクトールの葬いを営んだもの。それから、アマゾーンがやって来た、
兵^{つわもの}を殺す気象のひろい軍神アレースの御娘(ペンテシレイア)が。」

Welcker⁽⁹¹⁾ はこの2行が『アイティオピス』の冒頭の句であった(つまり、この詩が『イーリアス』の続編であった)可能性を指摘したが、もしこの説が正しければ、トロイア叙事詩圏の諸詩が『イーリアス』を中心として、つまりこの詩を補いトロイア戦争のストーリーを完結さ

せるために作詩された証左の一つと見る事ができる。Lesky⁽⁹²⁾もこの詩句を真正と見做したが、しかしこのままでは序歌（proem）がなく詩の冒頭としては余りにも唐突であることから今日でも多数の研究者から支持を得るには至っていない⁽⁹³⁾。『アイティオピス』の詩人が『イーリアス』の最後の行を少しばかり変えて詩の導入句としたとは考え難く、一般には文法家またはラブソードスが両詩をつなぐための継ぎ目として作ったと考えられており⁽⁹⁴⁾、必ずしも『アイティオピス』が『イーリアス』の続編として作詩された後代の詩と断定することはできない。

以上、『アイティオピス』に関する幾つかの問題点を中心に考察・検討を試みたが、次のように結論できるかも知れない。

前編の論文ではパトロクロスの葬礼競技の詩人が木馬の物語⁽⁹⁵⁾と結びついたアキレウスの葬礼競技の伝承（恐らく『アイティオピス』）を利用した可能性が示された。このアキレウスの葬礼競技では既に戦死しているはずのアンティロコスがパトロクロスの競技会に2度参加するだけでなく、ディオメデースやオデュッセウス等の『イーリアス』の主な英雄たちに交じって活躍し、また賞品について若いアンティロコスの不満や抗議に対してアキレウスが温和に対応し、戦車競走ではネストールが子アンティロコスに細やかな助言を与えている。こうした点は、『アイティオピス』におけるアンティロコスとアキレウスの友情やネストール父子の固い絆を反映し、恐らくアンティロコスが重要な役割を演じたことによると考えられる。

『オデュッセイア』24巻の第二ネキュイアの詩人が、パトロクロスとアキレウスの骨を納めた壺（*Il.* 23.82–92）とアンティロコスの骨（cf. *Aeth. arg.* 19 Bernabé ἔπειτα Ἀντίλοχόν τε θάπτουσι）を同じ墳墓に置いたことも、この3人の友人関係に対する注意深い配慮の表れであろう。この詩人が『イーリアス』23巻の作者と非常に近い関係にあった、或いは同一人であった可能性がある。『イーリアス』23巻の言語・文体が新しい特徴を示し、第10巻や第24巻と同じく『オデュッセイア』に特有な定型表現や単語等が頻出するという Chantraine–Goube による精細な分析結果⁽⁹⁶⁾もこのことを示唆していると思われる。

一説には、パトロクロスの葬礼競技が独立した語り物として朗詠されたとされ⁽⁹⁷⁾、恐らく『イーリアス』18巻の鍛冶の神ヘーパイストスが作製するアキレウスの盾の描写（18.478–608）と同様な状況⁽⁹⁸⁾が想定される。葬儀から競技への移行箇所である『イーリアス』23.257–8ではアキレウスが帰ろうとしたギリシア軍を引き留めたとあり、軍隊には葬儀の後競技を催す計画がなかったことは明らかである。しかし、軍隊の代わりに急に友人が競技会を主催者として開催し始めるというのは些か奇異であって、女神の子であるアキレウスの競技出場を避けるための苦肉の策であったかも知れない。アキレウスが参加すれば敗北することはまず考え難いからである。257行の κίον が通例のアオリストの意味（「去った」）であるか、或いは未完了過去（「去ろうとし（てい）た」）であるかという議論があるが、いずれにしても奇妙なこの移行箇所は、恐らく独立した詩が後に挿入された痕跡を留めていると推測することができる。

本稿では前論文と同様に、作品の中に見られる矛盾や不自然な点から借用関係を論ずるとい

う新分析論的な見方を取ったが、このアプローチは元来口誦詩論とは相容れない関係にある。厳密な口誦詩論では詩人は口演するたびに定型句、モチーフ、テーマ等のストックを利用しながら新たに作詩するという性格を持つので、固定したテキストを持たないと考えられる⁽⁹⁹⁾。とはいえ、口誦詩の流動性、或いは固定化には様々な段階が考えられ⁽¹⁰⁰⁾、Dowden⁽¹⁰¹⁾のように『アイティオピス』を文字化されていない、比較的固定した詩と見ることもでき、借用関係を論ずることも可能であるかも知れない⁽¹⁰²⁾。

実際、『イーリアス』の或る個所、例えば「船揃い」(2.494-779)、「アキレウスへの使節派遣」の段(9.182-98)、ネーレーイスたちのカタログ(18.39-49)は既にテキストがある程度固定した段階に達した既存の六脚律の語り物(hexameter narratives)を利用したものであるとしばしば言われている⁽¹⁰³⁾。Heubeck⁽¹⁰⁴⁾は『アイティオピス』が後代の書かれた作品であるゆえに、『オデュッセイア』の詩人には知られていなかったと述べるが、必ずしもそう断定する必要はないであろう。

ところで、大アイアースがアキレウスの遺体を運ぶフランソアの壺(ca. 570 B.C.)の両取手の画は、壺絵の制作当時アキレウスの葬礼競技よりも壺絵に描かれているパトロクロスの葬礼競技の方がより人気があったことを窺わせる。既に前編の論文⁽¹⁰⁵⁾において述べたように、その作詩の年代は運動競技の発展等を考慮して前600年頃と考えるべきであろうか。戦車競技の描写の大きな比重(競技会の3分の2近くに及ぶ)はアテーナイの貴族層や富裕層へ特に配慮して作詩されたことを物語るとも考えられ、記録に残るアテーナイの馬術競技者は漸く前6世紀初め(592 B.C.)に現れることもこのことを示唆するかも知れない。前560年頃の壺絵に描かれている『イーリアス』23巻の拳闘、相撲(レスリング)、徒競走のシーンは、当時現在の形にかなり似たversionが存在していたことを窺わせ、この頃既にパトロクロスの葬礼競技が恐らく文字化⁽¹⁰⁶⁾には至っていないが、或る程度固定していたと推察される。

『イーリアス』の詩人は、トロイア戦神話に関する多くの叙事詩だけでなく、他のジャンルの詩や民間説話等も熟知していたはずであり、様々な歌を歌ったと思われる。もちろん、今日の我々が想像するよりも遥かに多くの伝承素材を駆使できたと考えられるが、そうした中にアンティロコスの戦死やアキレウスの葬礼競技を語る『アイティオピス』が含まれていた、或いは詩人自身が口演の際に演目⁽¹⁰⁷⁾の一つとして歌った物語詩がそれであった可能性もあるかも知れない。

とはいえ、これまで『アイティオピス』に関する主な問題点について扱って来たに過ぎず、未だ十分な検討とは言い難く、しかもホメロス詩とその他のトロイア叙事詩圏詩(『キュプリア』や『小イーリアス』等)の関係についても今日では容易に扱え得ない多くの問題を抱えているが、こうした複雑かつ困難な問題については今後の検討課題としたい。

注

* 本稿は拙論、川崎 (2019) の続編として執筆したものである。

- (1) 以下、この前論文と同様 Epic Cycle (「叙事詩圏」或いは「叙事詩の環」) の詩やその梗概の引用に際しては Bernabé (1996²) の版を、また『イーリアス』と『オデュッセイア』(*Il.* と *Od.*) の邦語による引用には呉茂一 (1971-2), (2003) の訳書を用いた。因みに、この Epic Cycle 詩は一般に狭義には Homeros 詩 *Il.* と *Od.* を除くトロイア戦争をめぐる散逸した *Cypria*、*Aethiopis*、*Ilias Parva*、*Iliu Persis*、*Nosti*、*Telegonia* の 6 詩を指す。広義の叙事詩圏詩にはこの他オリュンポス神族とティーターン神族との戦 (Titanomachia) とテーバイ伝説を扱う叙事詩群も含まれる。
- (2) 或いは後 2 世紀の Proklos。いずれかは意見が分かれる。Cf. Burgess (2001) 198 n. 29.
- (3) この想定上の古い物語は、特に「新分析論者たち」(neoanalysts) によって、*Memnonis* 或いは *Achilleis* と呼ばれ、想定上の (not attested) 歌であるので **Memnonis* と表記されることが多い。この **Memnonis* に関する簡潔な説明については、cf. Currie (2016) 56 ‘Nor should we too readily assume that the **Memnonis*’ is a stable poem, rather than a more amorphous body of pre-Homeric poetry on the theme of Memnon and Achilleus; many scholars conceive of the **Memnonis* as a fluid ‘song-tradition’ rather than a specific, fixed poem.’
- (4) 以上の議論に関する簡単な解説については、川崎 (2019) 47 の序文とその各注を参照されたい。
- (5) Cf. *ibid.* 67 n. 86.
- (6) Willcock (1997) 185 はその理由 (cf. 川崎 (2019) 68 n. 90) の一つとして、前 2 世紀のアレクサンドリアの文献学者 Aristarchos が叙事詩圏 (Epic Cycle) の詩人たちを νεώτεροι「より新しい人たち」と呼んでいる点を挙げている。

Homeros 詩の古注で用いられている νεώτεροι は Homeros 以降の Hesiodos から前 3 世紀の詩人 Euphorion までの様々な種類の詩人を含む。時折神話や伝説等の解説の際に古注や 12 世紀のテッサロニーケーの大司教 Eustathius の Homeros 詩に関する注解書がこの νεώτεροι を引用するが、その内容が古注等の引用する κυκλικοί (「叙事詩圏詩の詩人たち」) の versions や Proklos の叙事詩圏詩に関する梗概と同様な場合がある一方、或る単語の意味や神馬 Areion の母親に関してこの両者が食い違い、比較対比されるケースも数例ある。Cf. Severyns (1928) 66-70. このことから κυκλικοί が Homeros 詩とは区別された、アルカイック期 (前 8 世紀前半～前 6 世紀末) に属する叙事詩圏の詩人を指す可能性があり、必ずしも κυκλικοί を νεώτεροι と同様には扱えないかも知れない。Cf. Fantuzzi (2015) 425 n. 53 ‘It is appealing to suppose that in parallel to *neōteroi* he (sc. Aristarchus) may have also used the general term *kyklikoi* for the archaic non-Homeric epos that he strove to keep well distinguished from Homer . . .’

- (7) 後注 (104) を参照。

- (8) Cf. Burgess (2001) 133.
- (9) Dowden (1996) 48–9, 56, 60–1; Currie (2006) 24 ≈ (2016) 56; cf. 川崎 (2019) 60 n. 5, 62 n. 16.
- (10) *Od.* 4.187–8.
- (11) *Ibid.* 11.543–51.
- (12) *Ibid.* 24.36–92.
- (13) *Od.* 24 巻の新しさについては、cf. Dodds (1968²) 7 ‘While there is virtual unanimity on certain points, such as the lateness of Book XXIV and of some parts of the Nekyia (both already recognized by Aristarchus) . . .’; Cairns (2001) 11 ‘The composer of *Odyssey* 24 seems to have known our *Iliad* or something very like it; many, however, would argue that that book is a late addition to the poem.’
- (14) この Achilles と Patroklos の死後のストーリーについて、Currie (2016) 57 の Table 2.4 の 6,7,8 に **Memnonis (Aethiopsis)* と *Il.* が簡潔に対比されている。因みに、Currie は **Memnonis (Aethiopsis)* という表現を用いている。つまり、*Aethiopsis* は後の古典期以後の Pindaros や Vergilius 等に知られているが、*Od.* に（恐らく *Il.* にも）知られているとしばしば想定される古い物語 (**Memnonis*) が *Aethiopsis* と同一であった可能性は完全には排除され得ないという意味で、(*Aethiopsis*) を付している。Cf. Currie (2006) 24 ≈ (2016) 56 (川崎 (2019) 60 n. 5 に引用)。
- (15) Odysseus は *Aethiopsis* においてトロイア勢の追撃に対して防戦に立ったとされ、*Od.* 5.309–10 ἥματι τῷ ὅτε μοι πλεῖστοι χαλκήρεα δοῦρα/ Τρῶες ἐπέρριψαν περὶ Πηλεΐωνι θανόντι「あの時とても多勢のトロイア武士が青銅をはめた槍を私へ投げてよこした、ペーレウスの子の屍をめぐるって戦いあいつ」は、*Od.* の詩人が *Aethiopsis*（或いは古い Memnon 物語）を知っていたことを示唆するかも知れない。Cf. Pestalozzi (1945) 22. 逆の見方については、cf. Willcock (1997) 178–9 n. 3 ‘The fight for Achilles’ body is referred to by Odysseus at *Od.* 5.309–10 . . . This shows at least that a post-Iliadic Arctinus did not invent Odysseus’ involvement in this scene on the model of *Iliad* 17, unless we place the *Odyssey* later than the *Aithiopsis*.’
- (16) Cf. West (2013) 43 ‘The *Odyssey* also contains an account of events following Achilles’ death (24.37–92) that is based either on the *Aethiopsis* or on some closely related poem’, 151, 153–5.
- (17) Edwards (1991) 18–9; Heubeck (1992) 363 on *Od.* 24.36–97; Janko (1992) 312–3, 378–9 on *Il.* 16.470–5; Richardson (1993) 129 on *Il.* 22.208–13. これに対して、Kirk (1990) 27 は neoanalysis に反論している。
- (18) Willcock (1997) 188; West (2003) 6 and n. 25; Allan (2005) 14 n. 62 (川崎 (2019) 61 n. 15 に引用)。
- (19) Willcock (1997) 188 and n. 28 ‘When Homer sang, on other occasions, of the death of Achilles, he doubtless included the lavish funeral of the hero and magnificent funeral games; these are mentioned in *Od.* 24.63–84 and 85–92 in the speech of Agamemnon quoted above. *Iliad* 23 no doubt carries the resonance from that other song, for, as with the Nereids, Patroclus does not, in heroic terms, rate the honors paid to him’.

- (20) ἀμφιφορεύς は普通液体を入れる容器であるが、ここでは Thetis が埋葬用にアカイア軍に与えた黄金の壺 (*Il.* 23.92, 170, *Od.* 24.74) であり、φιάλη (*Il.* 23.243, 253) は黄金製の納骨用の容器であって、死すべき Patroklos の遺骨が Achilles の骨と一緒にされるまで納めるために使用された。Cf. Petropoulou (1988) 484–7.
- (21) Kullmann (1960) 42 „Lediglich der gemeinsame Grabhügel aller drei ist eine Neuerung der Odyssee. Wahrscheinlich soll durch sie die Version der Aithiopis mit der der Ilias ausgeglichen werden: Die Aithiopis berichtete von der getrennten Bestattung des Antilochos und des Achill, die Ilias von der gemeinsamen Urne des Patroklos und des Achill. Da Antilochos dem Achill der Aithiopis genau so nahe steht, wie Patroklos dem Achill der Ilias, soll in der Odyssee Antilochos durch die getrennte Bestattung nicht zurückgesetzt erscheinen. Also eint ein gemeinsamer Grabhügel alle drei“; (1991) 445 = (1992) 121; cf. Heubeck (1992) 368 on *Od.* 24.76–9.
- 別な解釈については、cf. West (2003) 11 n. 48; Currie (2016) 242 ‘Here it seems that the *Odyssey* is accommodating the *Iliad*’s joint burial of Achilles and Patroklos (*Il.* 23.82–92) with a more traditional joint burial of Achilles and Antilochos in the **Memnonis* (*Aethiopis*) tradition . . .’
- しかし、Proklos の *Aethiopis* の梗概では Antilochos の埋葬が行われてからギリシア軍が墳墓を築き競技会を催すまでの間 (*Aeth. arg.* 19–22 Bernabé ἔπειτα Ἀντίλοχόν τε θάπτουσι καὶ τὸν νεκρὸν τοῦ Ἀχιλλεύου προτίθενται . . . οἱ δὲ Ἀχαιοὶ τὸν τάφον χῶσαντες ἀγῶνα τιθέασιν κτλ.) に、Thetis とその姉妹たち、また Musa たちが来て Achilles の死を嘆き、母 Thetis が息子を火葬壇からさらって Leuke 島へ運んだと語られており、この間に両者 (Achilles と Antilochos) の骨が同じ墳墓に埋葬されたこと (joint burial) はこの梗概からは窺えない。
- (22) Cf. Currie (2016) 59, 242.
- (23) Cf. *ibid.* 59 and n. 125.
- (24) Antilochos が先か、Patroklos が先か (即ち、どちらがモデルであったか) という一連の難解な議論については、cf. Willcock (1973) 8; Currie (2006) 26–7, (2016) 58–9, 73 (≈ *id.* (2006) 41) ‘The *Iliad*, I have argued, interacts with the **Memnonis* (*Aethiopis*) in transferring the pivotal role of Antilochos (the friend whose death Achilles will die to avenge) to Patroclus’; Davies (2016) 12.
- (25) Cf. Janko (1992) 313–4.
- (26) Cf. Reinhardt (1961) 367 „daher (sc. von der Dichtung von Antilochos) die Freundschaft zwischen Antilochos und Achill, die von dem Augenblick an, da Patroklos tot ist, als bekannt vorausgesetzt wird, . . . “; cf. Currie (2016) 67 n. 168 ‘*Od.* 24.76–9, implying that Antilochos became Achilles’ dearest friend only after Patroklos’ death, may be another such *hysteron proteron*.’
- (27) Heubeck (1992) 361 on *Od.* 24.16–8.
- (28) Cf. Edwards (1991) 62, 98 on *Il.* 17.377–83; Richardson (1993) 202–3.
- (29) *Od.* 11.467–9, 24.15–7; cf. *ibid.* 3.109–12.

- (30) *Aeth. arg.* 12–3 Bernabé καὶ συμβολῆς γενομένης Ἀντίλοχος ὑπὸ Μέμνονος ἀναιρεῖται. ἔπειτα Ἀχιλλεὺς Μέμνονα κτείνει.
- (31) E.g. Reinhardt (1961) 353–4; West (2003) 10 and n. 44.
- (32) *Aeth. arg.* 21–2 Bernabé καὶ μετὰ ταῦτα ἐκ τῆς πυρᾶς ἡ Θέτις ἀναρπάσασα τὸν παῖδα εἰς τὴν Λευκὴν νῆσον διακομίζει.
- (33) アルカイック期と古典期の詩において、Achilleus は死後しばしばエーリュシオン (Elysiön)、或いは至福の島に住まうとされる。また、神々或いは女神たちによる人間の「さらい (snatching)」は英雄化或いは不死化の頻繁なモチーフであった。Cf. Currie (2005) 362.
- (34) Cf. West (2013) 156.
- (35) Burgess (2001) 160–1; (2015) 51.
- (36) E.g. *pace* Davies (2016) 45, 76–7 esp. 77 ‘Some sort of cult to Achilles on the island is clearly presupposed, and the activities of Milesian colonists in the area of the Black Sea may well (*pace* Rohde) be a relevant datum when we are considering the interpretation of a poem attributed to the Milesian Arctinus.’
- (37) Cf. e.g. Rohde (1898²) II 371 Anm. 2 „Leuke, wohin schon die Aithiopsis den Achill zu ewigem Leben entrückt werden liess . . . , ist wohl ursprünglich ein rein mythisches Local, die Insel der farblosen Geister . . . “; Edwards (1985) 215 n. 1; Burgess (2001) 161 ‘Many scholars have pointed out that Leuke could have existed as a mythical place long before any island in the Black Sea was called Leuke’ and 251 n. 107; id. (2015) 51 n. 24.
- (38) *Aeth. arg.* 21–2 Bernabé καὶ μετὰ ταῦτα ἐκ τῆς πυρᾶς ἡ Θέτις ἀναρπάσασα τὸν παῖδα εἰς τὴν Λευκὴν νῆσον διακομίζει. οἱ δὲ Ἀχαιοὶ τὸν τάφον χώσαντες κτλ.
- (39) Cf. Burkert (1985) 205 ‘As a result of excavations it is known that many an alleged hero grave was not in fact a grave at all and contained no corpse’.
- (40) Cf. Edwards (1985) 224–5 nn. 23, 25.
- (41) *Cypr. arg.* 42–9 Bernabé καὶ τὸ δεύτερον ἡθροισμένου τοῦ στόλου ἐν Αὐλίδι Ἀγαμέμνων . . . Ἄρτεμις δὲ αὐτὴν (sc. Ἰφιγένειαν) ἐξαρπάσασα εἰς Τάυρους μετακομίζει καὶ ἀθάνατον ποιεῖ, ἔλαφον δὲ ἀντὶ τῆς κόρης παρίστησι τῷ βομῷ. 他方奇妙なことに、*Od.* 11.601–4 Τὸν δὲ μέτ’ εἰσενόησα (sc. Ὀδυσσεὺς) βίην Ἑρακλῆειν,/ εἰδῶλον· αὐτὸς δὲ μετ’ ἀθανάτοισι θεοῖσι/ τέρπεται ἐν θαλίῃ καὶ ἔχει καλλίσφυρον Ἥβην/ παῖδα Διὸς μέγαλοιο καὶ Ἥρης χρυσοπεδῖλου 「その次にはまた剛勇の士ヘーラクレスの幻像を見かけました、本物（の彼自身）のほうは、不死である神さま方とご一緒に、饗宴にたのしい日を過ごし、踵のきれいなヘーベを妻にしているのですが、〔ゼウス大神と黄金の鞋を召すヘーラーとの御娘という。〕」では冥界に Herakles の幻影 (εἰδῶλον) がおり、他方不死の Herakles は天上界に住まう。εἰδῶλον についての *Od.* の基本的な考え方と Herakles に関する民間信仰の折衷の試みで

- あろうか。Cf. Heubeck (1989) 114 on *Od.* 11.601–27. 但し、602–4 行 (602–3 ~ Hes. fr. 25.27–8 M-W ζώει δ' ἐνθά περ ἄλλοι Ὀλύμπια δώματ' ἔχοντες/ ἀθάνατος καὶ ἄγνηρος, ἔχων καλλ[ί]σ-φυρον Ἥβην; 604 = Hes. *Th.* 952, fr. 25.29 M-W, fr. 229.9 M-W) は古注によれば真正ではなく、前 6 世紀の神託編纂者 Onomakritos の作 (interpolation) という。Cf. e.g. Stanford (1959²) 403 on *Od.* 11.602–4; Burkert (1985) 210; West (2014) 223 n. 131.
- (42) Kullmann (1960) 41 „Wozu schütten die Achaier einen Grabhügel auf, wenn nicht für die Gebeine des Achilleus? Von einem Kenotaph ist nirgends die Rede!“
- (43) *Ibid.* 41. Cf. West (2013) 156.
- (44) 不死化 (immortalization) における火の役割は後代のギリシア語文献に、また前 4 世紀以後の墓碑 (ロドス島、アッティカ地方等) にも明確に示されている。Cf. Currie (2005) 379–80 n. 203.
- (45) Cf. Frazer (1921) 217 n. 1 ‘As the mortal remains of Achilles were buried in the Troad, and only his immortal spirit was said to dwell in the White Isle . . .’; Burgess (2001) 164 ‘But other evidence that we have from antiquity specifies that the mortal part of Achilles was burned on the pyre and buried when his immortal part went to his island of paradise’ and 253–4 nn. 126, 128. 因みに、埋葬されないまま冥界に入ってくるという Homeros 的ではないシーンについては、cf. *Od.* 24.186–7 ὥς ἡμεῖς, Ἀγάμεμνον, ἀπωλόμεθ', ὧν ἔτι καὶ νῦν/ σώματ' ἀκηδέα κείται ἐνὶ μεγάροις Ὀδυσῆος 「このようにして私らは、アガメムノーンよ、死んだのでした、しかもまだ屍は今でもオデュッセウスの屋敷うちに、顧られずほっとかれて。」ここでは、Amphimedon を含む求婚者たちの遺体は火葬(埋葬)されずに地上にあるが、彼らの霊は冥界にいる。Cf. Richardson (1993) 173 on *Il.* 23.71–4 ‘Patroklos states for the first time in Homer the common ancient view that it was cremation or burial which enabled the soul to enter Hades properly’.
- (46) Cf. Burgess (2001) 168 and 256 n. 157. トロイア沿岸の Achilleus の墓所において行われていた祭祀活動の反映であろうか。
- (47) E.g. Eur. *Hec.* 107–53, 218–28, 521–82; Ov. *Met.* 13.439–80; Sen. *Tro.* 168–202, 938–44, 1118–64; Q.S. 14.209–328; cf. Frazer (1921) 240–1 n. 1. 但し、*Il. Persis* arg. 22–3 Bernabé ἔπειτα ἐμπρήσαντες τὴν πόλιν Πολυξένην σφαγιάζουσιν ἐπὶ τὸν τοῦ Ἀχιλλέως τάφον, Ibyc. fr. 307 *PMG* ὑπὸ Νεοπολέμου φασὶν αὐτὴν (scil. Πολυξένην) σφαιγιασθῆναι Εὐριπίδης καὶ Ἴβυκος, Apollod. *Epit.* 5.23 Πολυξένην δὲ ἐπὶ τῷ Ἀχιλλέως τάφῳ κατέσφαξαν, Paus. 10.25.10 ἀποθανεῖν δὲ αὐτὴν (sc. Πολυξένην) ἐπὶ τῷ Ἀχιλλέως μνήματι ποιηταὶ τε ἄδουσι は、Polyxene の殺害の理由については語っていない。
- (48) Monro (1901) 377.
- (49) Edwards (1985) 225–7.
- (50) *Il.* 23.69–79 esp. 75–6 καὶ μοι δὸς τὴν χεῖρ' ὀλοφύρομαι, οὐ γὰρ ἔτ' αὐτίς/ νίσομαι ἐξ Ἀΐδαο,

ἐπὶν με πυρὸς λελάχητε 「せめては、その手を握らせてくれ、哭いて頼むぞ。もう再びとは冥府の境から戻れぬことゆえ、一度私に火を掛けたらば。」

- (51) Cf. Currie (2005) 31.
- (52) Cf. *ibid.* 56–7.
- (53) *Aeth. arg.* 14–5 Bernabé.
- (54) *Teleg. arg.* 1.18–9 Bernabé.
- (55) Burgess (2001) 167–8.
- (56) 英雄崇拜 (hero cult) が叙事詩の影響によるか否かの複雑な議論については、cf. e.g. Burgess (2001) 256 n. 154; Currie (2005) 48–9. 因みに、Euboia の Lefkandi において 1980 年に発見された戦士の埋葬塚 (前 10 世紀) は、Patroklos の埋葬に細部にわたって類似しているが、Homeros 詩がこうした埋葬の慣習に影響を与えたという説に対して、むしろ逆にこれを反映しているという見方については、cf. Richardson (1993) 188 on *Il.* 23.166–76; Currie (2005) 49.
- (57) 例えば、Kyllene 山麓の Arkadia 王 Aipytos の墳墓 (*Il.* 2.603–4)、戦死した Sarpedon の遺体の埋葬 (*Il.* 16.674–5)。Homeros 詩が hero cults を知らないのではなく、意図的にその言及を抑えている、或いはそれを前提としている可能性とその例 (特に Sarpedon、Odysseus、Phrontis の 3 例) については、cf. Currie (2005) 50–7.
- (58) E.g. Monro (1901) 360 ‘It (sc. the carrying away of Achilles to the island of Leuce) is connected with the custom of hero-worship, the absence of which is so distinctive a mark of the Homeric age.’ Cf. Burgess (2001) 256 n. 152.
- (59) Cf. Burgess (1997) 9.
- (60) Welcker (1882²) 174.
- (61) Erbse (1993) 397.
- (62) *Ibid.* Anm. 20 „Die Regel ‘Besser motiviert = älter’ ist eben von zweifelhaftem Wert.“
- (63) Cf. e.g. West (2003) 10 ‘As mentioned earlier, many have thought that the episode in which one of Nestor’s horses is wounded and he is rescued from Hector by Diomedes (8.80ff.) was derived from the episode related in the Aethiopis where he was saved by Antilochus’; Rengakos (2015) 316 (川崎 (2019) 61 n. 12 に引用). 反対意見については、cf. e.g. West (2013) 146 ‘Many scholars have held that the Antilochos episode was primary and the *Iliad* passage derived from it. But the converse relationship is equally plausible and must be assumed if Memnon is a post-Iliadic figure.’
- (64) Kullmann (1960) 314–5.
- (65) *Il.* 8.96–8 ἀλλὰ μὲν ὄφρα γέροντος ἀπώσομεν ἄγριον ἄνδρα./ ὦς ἔφατ’ οὐδ’ ἐσάκουσε πολύτλας δῖος Ὀδυσσεύς./ ἀλλὰ παρήϊξεν κοίλας ἐπὶ νῆας Ἀχαιῶν 「・・・まあ停まりたまえ、老人からあの猛しい男を追ひ払うために。」こう言ったが、辛抱よく気高いオデュッセウスは聞き入れずに、どんとアカイア軍の、中の空ろな船陣のかたへ奔っていった。」

- オデュッセウスが「傍らを走り抜けていった」という理由については古代から議論があり、前2世紀の文献学者 Aristarchos は 97 行の ἑσακούειν を「耳を傾ける」の意味（つまり、Odysseus は Diomedes の呼びかけを無視した）に解したが、混乱の中聞こえなかったという意（for the force of the compound ἑσακούειν (*‘properly hear’*), cf. LSJ s.v. εἰσακούω I.2. ‘in Poets, simply, *hear*’; Kirk (1990) 306 on *Il.* 8.97–8) かも知れない。よく似た状況（敵の叫喚の中、味方の命令が聞き取れないという場面）については、cf. Thuc. 4.34.3 ὑπὸ δὲ τῆς μείζονος βοῆς τῶν πολέμιων τὰ ἐν αὐτοῖς παραγγελλόμενα οὐκ ἑσακούοντες; Leaf (1900–2) I 339 on *Il.* 8.97.
- (66) *Il.* 8.99–100 Τυδείδης δ’ αὐτὸς περ ἐὼν προμάχοισιν ἐμίχθη./ στῆ δὲ πρόσθ’ ἵππων Νηληϊάδαο γέροντος 「それでテューデウスの子は自分独りではあったが、先陣の中へ交って、ネーレウスの子（である）老人の馬車の前に来て立ち。」但し、御者の Sthenelos を伴っている。Cf. Kirk (1990) 307 ad loc.
- (67) 添え馬が Sarpedon の槍に刺されて死んだために他の2頭がてんでに向きを変えた状況下で、Automedon が添え馬の綱を断ちこの2頭の向きを正したというシーンについては、cf. *Il.* 16.466–76.
- (68) Pace Leumann (1950) 227 Anm. 21 „das durch einen Pfeil des Paris getötete Nestorpfers war hier (sc. in der *Aithiopsis*) kaum ein Beipferd (Pind. *Py.* 6, 32).“
- (69) Cf. 川崎 (2019) 60 n. 3.
- (70) *Aeth.* arg. 12–4 Bernabé.
- (71) *Il.* 16.818–57, 22.322–63.
- (72) これに関する説明については、cf. Kullmann (1981) 7–8 = (1992) 69; (1984) 309–10 = (1992) 142–3; (1991) 429, 440–2 = (1992) 104, 115–7; Willcock (1997) 180–3; Burgess (1997) 1 n. 2; cf. Currie (2016) 248 ‘This view of the relationship between the **Memnonis* (*Aethiopsis*), *Iliad* VIII, and *Pythian* VI has often been regarded as a cornerstone of neoanalytical scholarship’ and n. 10.
- (73) Burgess (1997), esp. 7, 10–5.
- (74) *Aeth.* arg. 12–3 Bernabé καὶ συμβολῆς γενομένης Ἀντίλοχος ὑπὸ Μέμνονος ἀναιρεῖται; *Od.* 4.188 τόν (sc. Ἀντίλοχον) ῥ’ Ἡοῦς ἔκτεινε φαεινῆς ἀγλαὸς υἱός; Pind. *Pyth.* 6.28–42; Apollod. *Epit.* 5.3 Ὅτι Μέμνονα . . . καὶ πολλοὺς τῶν Ἑλλήνων κτείναντα καὶ Ἀντίλοχον κτείνει ὁ Ἀχιλλεύς; Q.S. 2.400–1 ἦλυθέ (sc. Ἀχιλλεύς) οἱ (sc. Μέμνονι) κατέναντα χολούμενος Ἀντιλόχοιο/ ἢδ’ ἄλλων κταμένων.
- (75) Allan (2005) 14 n. 61.
- (76) 父を救うために死んだことは、*Aeth.* arg. 12–3 Bernabé, *Od.* 3.111–2, 4.187–8 には触れられてはいない (cf. Kelly (2006) 13 ‘the precise manner of Antilokhos’ death in the *Aithiopsis* remains unknown’; Currie (2016) 249 and n. 26) が、Pind. *Pyth.* 6 以降しばしば言及されている。Cf. e.g. Xen. *Cyneg.* 1.14 Ἀντίλοχος δὲ τοῦ πατρὸς ὑπεραποθανὼν τοσαύτης ἔτυχεν εὐκλείας, ὥστε

- μόνος φιλοπάτωρ παρὰ τοῖς Ἑλλησιν ἀναγορευθῆναι; Q.S. 2.243–6 Τοὺς δ' ὁπότ' ἐξενάρειεν (sc. Μέμνων), ἐπώχετο Νηλέος υἱά/ κτεῖναί μιν μεμαώς· τοῦ δ' Ἀντίλοχος θεοειδής/ πρόσθ' ἐλθὼν ἵθυσε μακρὸν δόρυ· καὶ οἱ ἄμαρτε/ τυτθὸν ἀλευαμένοιο, 7.49–50 κάτθανε (sc. Ἀντίλοχος) δ' εἶνεκ' ἐμείο σαωσέμεναι μενεαίνων/ ὃν πατέρ'; Welcker (1882³) 174–5 Anm. 5; Willcock (1997) 180 'other ancient authorities support the facts as given by Pindar'; Currie (2016) 249 n. 27.
- (77) Cf. *Il.* 17.685–99, 18.2–21; Chantraine–Goube (1972) 83 on *Il.* 23.556.
- (78) Currie (2016) 58–9.
- (79) *Il.* 23.555–6 Ὡς φάτο, μείδησεν δὲ ποδάρκης δῖος Ἀχιλλεύς/ χάριων Ἀντιλόχῳ, ὅτι οἱ φίλος ἦεν ἑταῖρος 「こう言うと、脚の速い、勇ましいアキレウスは微笑を浮かべた、もともと親しい仲間なもので、アンティロコス（の言葉）を興がり。」
- (80) Cf. Richardson (1993) 229 on *Il.* 23.555–6.
- (81) Cf. Kullmann (1984) 312–3 = (1992) 145.
- (82) Q.S. 2.388–95 (Nestor が Achilles に向かって、殺された戦友のために心を痛めるのが友であるから、殺害された Antilochos の屍を護るようにと促した時にアキレウスは友のことを思い悲痛に襲われる), 2.447–8 Ἐκτορα γὰρ Πατρόκλοιο, σὲ (sc. Μέμνονα) δ' Ἀντιλόχοιο χολωθεῖς (sc. Ἀχιλλεύς)/ τίσομαι, 3.10–1 Πηλείδης δ' ἐτάροιο χολούμενος Ἀντιλόχοιο/ σμερδὸν ἐπὶ Τρώεσσι κορύσσετο.
- (83) Cf. Currie (2016) 58 'His (sc. Burgess's) scepticism is justified by the fact that the Summary of the *Aethiopis* does not explicitly present Achilles' killing of Memnon as a vengeance killing. (Quintus, for what it is worth, does: 2.388–401, 447–8, 3.10)' and n. 116 'Burgess 1997: 8 and 10 perhaps underestimates the significance of this.'
- (84) Kelly (2006) 22–5 esp. 22–3 'Neoanalysts (and others) will therefore still insist that the Pindaric version reflects authentically the story of the *Aithiopis*. This position, that the *Nestorbedrängnis* and *Aithiopis* episodes are so closely connected as to account for the verbal, thematic and structural parallels between the Iliadic passages and Pindar, must in the end be regarded as unlikely', 24–5 'First, there are no difficulties with the *Nestorbedrängnis*, and no reason to believe that the *Iliad* poet was drawing on anything other than traditional motifs for this scene. Second, Pindar's relationship with the *Iliad* renders his status as witness to the *Aithiopis* deeply problematic.'
- (85) Kelly (2006) 17 'The myth of *Pythian* 6 appears to be a concentrated and deliberate recomposition of the Θ and Ψ episodes'.
- (86) Kelly (2006) 14–7 esp. 17.
- (87) Currie (2016) 247–53 esp. 248, 252–3; cf. West (2013) 146 n. 28 'A. Kelly, *Hermes* 134 (2006), 13–19, argues that Pindar's account is so coloured by the *Iliad* as to be unreliable as a source for the *Aethiopis*. He does not persuade E. Heitsch, *Rh. Mus.* 151 (2008), 2 n. 9, or me.'

- (88) Currie (2016) 247. 因みに、Pindaros の version は圧縮されているが、神話の通常の version の主要な点については変更や改変を行わないらしい。Cf. *ibid.* 251 n. 35.
- (89) *Il.* 23.306–48. 因みに、Antilochos は「ネストールの子」として頻繁に言及されており (*Il.* 5.565, 6.33, 13.400, 555, 15.589, 16.317, 17.653, 18.16, 23.302, 353, 541, 755)、戦車競技では父親の馬を使用している。Cf. *ibid.* 23.402–3 Ἀντίλοχος δ' ἵπποισιν ἐκέκλετο πατρός ἐοῖο· ἔμβητον καὶ σφῶϊ· τιταίνετον ὅττι τάχιστα 「アンティロコスは、自分の親父の馬に向かって呼ばわるよう、「馳り込むのだ、お前達も。力の限り早く曳いてけ」。」
- (90) *Aeth.* arg. 4–6 Bernabé Ἀμαζῶν Πενθεσίλεια παραγίνεται Τρωσὶ συμμαχήσουσα, Ἄρεως μὲν θυγάτηρ, Θρᾷσση δὲ τὸ γένος· καὶ κτείνει αὐτὴν ἀριστεύουσαν Ἀχιλλεύς κτλ.
- (91) Welcker (1882²) 169 „Es ist möglich dass dies der Anfang des Gedichts von Arktinos war indem es den Schlußvers der Ilias aufnahm um es mit ihr wie durch einen Ring zu verketteten.“
- (92) Lesky (1967) 137.17–22 = (1968) 823.17–22; (1971³) 105–6.
- (93) E.g. Wilamowitz (1884) 373 „den (sc. *Aeth.* fr. 1.1 Bernabé ὥς . . . Ἀμαζῶν) keine überlieferung, sondern nur moderne willkür für den anfang der Aithiopis ausgibt“; Monro (1901) 356; Kullmann (1960) 46; Burgess (2001) 140 and 242 n. 23; Rengakos (2015) 312–3; Davies (2016) 90–5; Brügger (2017) 282–3 on *Il.* 24.804.
- (94) 簡潔な解説については、cf. 岡 (1988) 249–50.
- (95) 因みに、Arktinos 作『イーリオン陥落』の梗概 (*Il. Persis* arg. 3–6 Bernabé) にはトロイア人の間で木馬の処置について議論が3通りに分かれ、第3の案、即ち女神 Athena に奉納する案が採択されたと言われているが、*Od.* 8.506–10 にも同様のエピソードが盲目の吟唱詩人 Demodokos の口を借りて歌われており、第1（崖から落とす案）と第3の案がそれぞれ *Od.* の第2と第3（神々への奉納物としてそのまま置いておく）の案に類似する。
- (96) Cf. 川崎 (2019) 55.
- (97) Cf. Seaford (1994) 163 ‘Perhaps then the *Iliad* incorporated a ‘contests’ narrative that was once (like the Doloneia) separately recited.’
- (98) Cf. Kirk (1962) 324 ‘yet it (sc. the Shield of Achilles in *Il.* 18) must often have been chosen for separate singing or recitation, and its extraordinarily abrupt ending in our texts may be connected with this.’ この130行ばかり（483–608）の描写は言語や内容が *Il.* とは異質であり、前3世紀の文献学者、アレクサンドリア図書館の初代館長 Zenodotos 以来その真正さが疑われている。
- (99) Cf. Edwards (1991) 17–8 ‘It is inherently likely that . . . and in the bardic oral tradition, in which Homer almost certainly still worked, to sing a song meant (to some extent at least) to compose it anew each time it was performed’; Cairns (2001) 35.
- (100) Cf. Currie (2016) 13–5. 文字化には至っていないが、或る程度固定し比較的安定したテキストを持つ初期叙事詩が存在した可能性については、cf. *ibid.* 12–22 esp. 16–8, 75, 102, 252.

- (101) Dowden (1996) 47 ‘There is some telling, e.g. of the *Aithiopsis*, which is sufficiently fixed for Homer to allude to it specifically, to inform his work by it, and for his audience to recognize this interaction . . . It is perfectly possible to have a fixed (memorised) text in an oral tradition . . .’; cf. Cairns (2001) 36 ‘That the *Iliad* makes use of material which had already attained a degree of textual fixity (though not necessarily in written form) cannot really be doubted’; Currie (2016) 252 ‘But there are a number of reasons for thinking that Homer was capable of drawing on fixed (but not necessarily written) texts.’
- (102) これに対して、Homeros が借用できた初期叙事詩の固定したテキストは存在しなかったと主張する反論については、cf. Currie (2016) 13 and n. 72; cf. Cairns (2001) 35 ‘Neoanalysis thus raises the question of allusion in oral or oral-derived epic: for strict oralists, this question does not arise, for (they argue) in an oral tradition there can be no concept of a fixed text to which allusion could be made; poets make use of a stock of motifs common to many other narratives and traditions’.
- (103) Cf. e.g. Kullmann (1981) 23 = (1992) 83 „offenbar der Katalog zum größten Teil wörtlich von anderswoher übernommen wurde“; Dowden (1996) 59; Currie (2016) 18 and n. 105, 73–5, 158 and n. 67.
- (104) Pace Heubeck (1992) 362 on *Od.* 24.16–8. Cf. Kullmann (1991) 429–30 = (1992) 105 „Heute wird man sagen können, daß vieles dafür spricht, daß die genannten kyklischen Epen (*sc.* *Kyprien*, *Aithiopsis* und *Iliupersis*) nachhomerische Verschriftlichungen von epischer Dichtung sind, die zur Zeit Homers schon mündlich existierte.“
- (105) 川崎 (2019) 59.
- (106) 最近 Homeros 詩の文書化の時期をギリシア文字発明の 800 B.C. 頃近くに設定する説、或いはその導入 (800 B.C. 後間もなく) 後約 100 年頃に置く意見も見られる。Cf. Currie (2016) 22 n. 128. これに対して、前 6 世紀末頃に置く見方については、cf. 久保 (1992) 4–5, 30–1, 104. その他、Homeros 詩の文字化の時期に関する諸説 (前 8 世紀末、前 7 世紀前半、前 6 世紀等) の簡潔な解説については、cf. Cairns (2001) 1–3. 因みに、ミュケーナイ文明崩壊後のギリシア人の最初の文字使用は前 9 世紀末、或いは前 8 世紀初頭とされ、現存最古の公文書 (決議文、条約等) は前 650 年頃の或る時に遡る。それまでは主に所有権、芸術作品、死後の記念物等に関する私事に集中している。Cf. Christesen (2007) 86.
- (107) Memnon に関する古い物語を Homeros 自身が歌った、或いは彼のライバルたちが歌ったという説については、cf. Edwards (1991) 19 ‘My own view is that in many episodes of books 17–20 Homer was conscious of parallels which existed in contemporary oral versions of the Memnon tale, as sung by himself or by his rivals.’

【引用文献】

- Allan, W., Arms and the Man: Euphorbus, Hector, and the Death of Patroclus, *CQ* 55 (2005) 1–16.
- Bernabé, A., *Poetae epici Graeci: Testimonia et fragmenta*. Pars 1. Edited by A. Bernabé, 2. Aufl., Leipzig 1996.
- Brügger, C., *Homer's Iliad: The Basel Commentary, Book XXIV*. Translated by B. W. Millis and S. Strack and edited by S. D. Olson, Boston/ Berlin 2017.
- Burgess, J. S., Beyond Neo-analysis: Problems with the Vengeance Theory, *AJPh* 118 (1997) 1–19.
- , *The Tradition of the Trojan War in Homer and the Epic Cycle*, Baltimore/ London 2001.
- , ‘Coming adrift: The limits of reconstruction of the cyclic poems’, in Fantuzzi and Tsagalis (2015), 43–58.
- Burkert, W., *Greek Religion*, trans. J. Raffan, Cambridge, Mass. 1985 (orig. pub. in German as *Griechische Religion der archaischen und klassischen Epoche*, Stuttgart 1977).
- Cairns, D. L., ‘Introduction’, in D. L. Cairns (ed.), *Oxford Readings in Homer's Iliad*, Oxford 2001, 1–56.
- Chantraine, P. et Goube, H., *Homère: Iliade, Chant XXIII, édition, introduction et commentaire, 2^e éd. revue et corrigée* (Érasme 9), Paris 1972.
- Christesen, P., *Olympic Victor Lists and Ancient Greek History*, Cambridge 2007.
- Currie, B. G. F., *Pindar and the Cult of Heroes*, Oxford 2005.
- , ‘Homer and the Early Epic Tradition’, in M. J. Clarke, B. G. F. Currie, and R. O. A. M. Lyne (eds.), *Epic Interactions, Perspectives on Homer, Virgil, and the Epic Tradition Presented to Jasper Griffin by Former Pupils*, Oxford 2006, 1–45.
- , *Homer's Allusive Art*, Oxford 2016.
- Davies, M., *The Aethiopis: Neo-Neoanalysis Reanalyzed (Hellenic Studies 71)*, Cambridge, Mass./ London 2016.
- Dodds, E. R., ‘Homer’, in M. Platnauer (ed.), *Fifty Years (and Twelve) of Classical Scholarship*, 2nd edn, Oxford 1968, 1–17, 31–5.
- Dowden, K., Homer's Sense of Text, *JHS* 116 (1996) 47–61.
- Edwards, A. T., Achilles in the Underworld: *Iliad*, *Odyssey*, and *Aethiopis*, *GRBS* 26 (1985) 215–27.
- Edwards, M. W., *The Iliad: A Commentary*, Vol. V: *Books 17–20*, Cambridge 1991.
- Erbse, H., Nestor und Antilochos bei Homer und Arktinos, *Hermes* 121 (1993) 385–403.
- Fantuzzi, M., ‘The aesthetics of sequentiality and its discontents’, in Fantuzzi and Tsagalis (2015), 405–29.
- Fantuzzi, M. and Tsagalis, C. (eds.), *The Greek Epic Cycle and its Ancient Reception: A Companion*, Cambridge 2015.
- Frazer, J. G., *Apollodorus: The Library*, Vol. II, with an English translation by Sir James George Frazer,

- London/ New York 1921 (repr. Cambridge, Mass./ London 1979).
- Heubeck, A., ‘Books IX–XII’, in A. Heubeck, and A. Hoekstra, *A Commentary on Homer’s Odyssey*, Volume II: *Books IX–XVI*, Oxford 1989 (repr. Oxford 1992), 3–143.
- , ‘Books XXIII–XXIV’, in J. A. Russo, M. Fernández-Galiano, and A. Heubeck, *A Commentary on Homer’s Odyssey*, Volume III: *Books XVII–XXIV*, Oxford 1992, 313–418.
- Janko, R., *The Iliad: A Commentary*, Vol. IV: *Books 13–16*, Cambridge 1992.
- 川崎義和「パトロクロスの葬礼競技と『アイティオピス』」『メディア・コミュニケーション研究』72 (2019) 47–74.
- Kelly, A., Neanalysis and the Nestorbedrängnis: A Test Case, *Hermes* 134 (2006) 1–25.
- Kirk, G. S., *The Songs of Homer*, Cambridge 1962.
- , *The Iliad: A Commentary*, Vol. II: *Books 5–8*, Cambridge 1990.
- 久保正彰『ギリシャ・ラテン文学研究——叙述技法を中心に——』岩波書店 1992.
- Kullmann, W., *Die Quellen der Ilias (Hermes Einzelschrift 14)*, Wiesbaden 1960.
- , Zur Methode der Neanalyse in der Homerforschung, *WS* 15 (1981) 5–42 = Kullmann (1992) 67–99.
- , Oral Poetry theory and Neanalysis in Homeric Research, *GRBS* 25 (1984) 307–23 = Kullmann (1992) 140–55.
- , ‘Ergebnisse der motivgeschichtlichen Forschung zu Homer (Neanalyse)’, in J. Latacz (hrsg.), *Zweihundert Jahre Homer-Forschung: Rückblick und Ausblick*, Stuttgart/ Leipzig 1991, 425–55 = Kullmann (1992) 100–34.
- , *Homerische Motive*, Stuttgart 1992.
- 呉茂一訳『イーリアス』上下、平凡社 2003 (岩波文庫版三巻本、改版 1964 年刊の復刻・再編集)。
- (訳)『オデュッセイア』上下 (岩波文庫) 岩波書店 1971–2.
- Leaf, W., *The Iliad*, edited with apparatus criticus, prolegomena, notes, and appendices, I–II, 2nd edn, London 1900–2 (repr. Amsterdam 1971).
- Lesky, A., *Homeros: Sonderausgaben der Paulyschen Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart 1967 = *RE* Suppl. XI (1968) s.v. Homeros, 687–846.
- , *Geschichte der Griechischen Literatur*, 3., neu bearbeitete und erweiterte Aufl., Bern 1971.
- Leumann, M., *Homerische Wörter*, Basel 1950.
- Monro, D. B., ‘Homer and the Cyclic Poets’, in D. B. Monro, *Homer’s Odyssey, Books XIII–XXIV*, Oxford 1901, 340–84.
- 岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社 1988.
- Pestalozzi, H., *Die Achilleis als Quelle der Ilias*, Erlenbach/ Zürich 1945.
- Petropoulou, A., The Interment of Patroklos (*Iliad* 23.252–57), *AJPh* 109 (1988) 482–95.
- Reinhardt, K., *Die Ilias und ihr Dichter*, Göttingen 1961.

- Rengakos, A., 'Aethiopsis', in Fantuzzi and Tsagalis (2015), 306–17.
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary*, Vol. VI: Books 21–24, Cambridge 1993.
- Rohde, E., *Psyche: Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen*, 2 Bde. in 1, Darmstadt 1974
(fotomechanischer Nachdruck der 2. Aufl., Freiburg i.B./ Leipzig/ Tübingen 1898).
- Seaford, R., *Reciprocity and Ritual: Homer and Tragedy in the Developing City-State*, Oxford 1994.
- Severyns, A., *Le Cycle épique dans l' école d'Aristarque*, Paris 1928.
- Stanford, W. B., *The Odyssey of Homer*, Vol. I: *Books I–XII*, 2nd edn, Macmillan, London 1959 (repr. St. Martin's Press, New York 1987).
- Welcker, F. G., *Der epische Cyclus, oder die homerischen Dichter*, II, 2. Aufl., Bonn 1882 (repr. Hildesheim/ New York 1981).
- West, M. L., *Iliad and Aethiopsis*, *CQ* 53 (2003) 1–14.
- , *The Epic Cycle: A Commentary on the Lost Troy Epics*, Oxford 2013.
- , *The Making of the Odyssey*, Oxford 2014.
- Wilamowitz-Moellendorff, U. von, *Homerische Untersuchungen*, Berlin 1884.
- Willcock, M. M., The Funeral Games for Patroclus, *BICS* 20 (1973) 1–11.
- , 'Neoanalysis', in I. Morris and B. Powell (eds.), *A New Companion to Homer (Mnemosyne Suppl.* 163), Leiden 1997, 174–89.

(2019 年 11 月 12 日提出、2020 年 2 月 13 日受理)

《SUMMARY》

The Funeral Games of Patroklos and *Aethiopis* (2)

Yoshikazu KAWASAKI

The previous paper concluded that the *Aethiopis* influenced the poet who composed the *Iliad*. This paper aims to reexamine the relationship between the *Aethiopis* and the *Iliad*, and the reexamination will center on several issues that the previous paper did not address.

1. This paper will make a comparative analysis mainly of *Od.* 24.36–92 (the second Nekyia) and the funeral of Achilles depicted in the *Aethiopis*. It will then consider whether the poet of the *Odyssey* knew the *Aethiopis*. Next, this paper will look at the strange burial method mentioned in *Od.* 24.76–9 (the urn containing the ashes of Achilles and Patroklos is buried apart from the ashes of Antilochos). It will then argue that the friendship between Antilochos and Achilles (the *Aethiopis*) is more traditional than the friendship between Patroklos and Achilles (the *Iliad*), and, as a result, that the former most likely precedes the latter. In addition, the relationship between the White Island (the island of Leuke) and the Milesian colonization of the Black Sea, and the hero cult of Achilles will be examined.

2. A counterargument to the accepted view—the episode in Pind. *Pyth.* 6.28–42 (Antilochos was killed by Memnon when he attempted to save Nestor, his father) derives from the *Aethiopis*—will be reexamined in this paper through an analysis of the texts of Pind. *Pyth.* 6.28–42 and *Il.* 8.80–117. In addition, this paper will examine the arguments that deny the “vengeance theory” (the foundation of neoanalysis), which asserts that Achilles killed Memnon out of a strong desire for revenge after his best friend Antilochos was killed.

3. This paper will touch upon the widely accepted view that *Aeth.* fr.1 Bernabé, the variant reading of the last line (24.804) of the *Iliad*, is not the opening passage of the *Aethiopis*. It will then point out that one need not necessarily consider the *Aethiopis* a later poem. Finally, this paper will present the following as its conclusion.

The *Aethiopis* was a poem whose relatively fixed text (not verbatim) allowed the borrowing of motifs or stories. However, it was not written down. Additionally, while the poet of the *Iliad* composed many poems including those about, but not limited to, the myth of the Trojan War, he inherited his predecessors’ poems and added them to his repertoires; the *Aethiopis* was one of the works that he performed. The poet may have used the *Aethiopis* to compose an independent or separate narrative, the funeral games of Patroklos.